

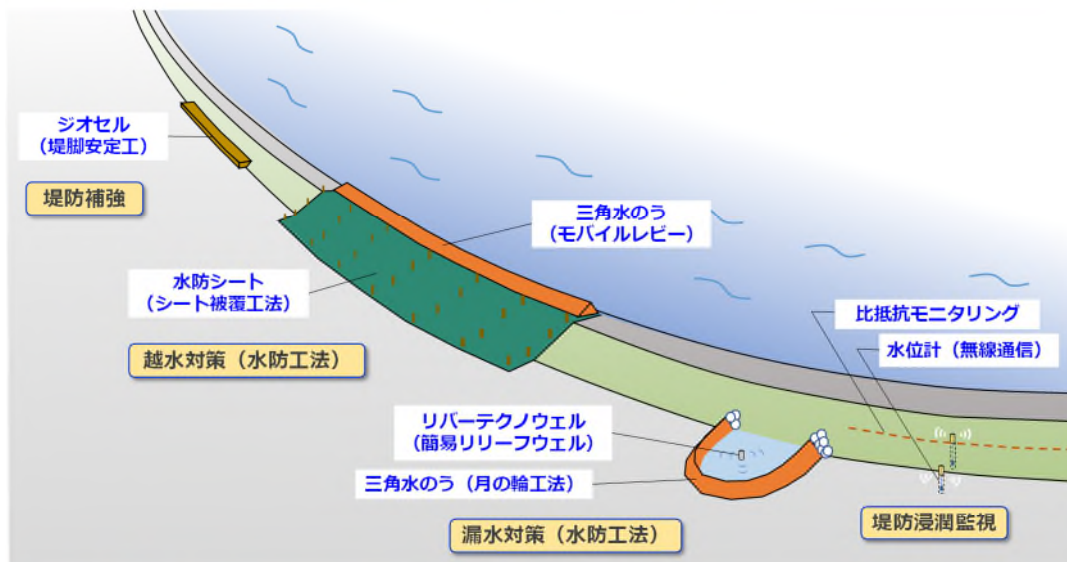
水防災新技術のご紹介



各界との知的連携により、河川環境及び防災に関する技術の開発と普及

RRT 一般社団法人リバーテクノ研究会
Research Institute of River Technology

水防災新技術の適用イメージ



ハイブリッドパネル堤
(モバイルレバー)

溢水対策 (水防工法)

三角水のうを用いた越水防止工法

目的

本工法は、堤防上に三角水のうを設置し、堤防を三角水のうの高さだけ一時的に嵩上げすることにより、越水や溢水を防止する工法

概要

1. 工法の特徴

本工法は、越水防止工法としてこれまで行われてきた土のうの積み上げに変わる工法である。三角水のうは、三角形の断面を持つチュー

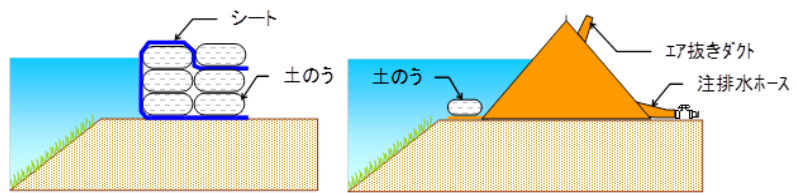


図1-1 改良土のう工法(左)と『三角水のう』(右)の設置イメージ

ブ状の水のうである。三角水のうは延長方向にジョイントすることが可能で、堤防上に連続的に設置することで設置区間の堤防を一時的に嵩上げすることができ、堤防を越水・溢水する水を防ぐことができる。

三角水のうに給水ポンプを用いて注水することで設置することができ、土のうの積み上げに比較して少人数で設置することが可能である。

2. 三角水のうの諸元

三角水のうは、高さと本体を構成する膜材の強度により、三種類のタイプがある。

表 III-1 三角水のうの標準仕様

| 品番 | | A-80 | A-50 | B-50 | 備考 |
|------|---------------------|--|------------|--------|-------------|
| 類型 | 型式 | 大型 | 標準型 | | |
| | 膜材 | 高強度タイプ | | 標準タイプ | |
| 仕様 | 高さ(cm) (注水時) | 110 (100) | 70 (60) | | |
| | 幅(cm) | 200 | 120 | | |
| | 全長(cm) | 400 | 600 | | |
| | 容量(m ³) | 約4.4 | 約2.5 | | |
| | 質量(kg) | 29 | 26 | 16 | 本体のみ |
| 材質 | | 基布：ポリエステル100% コーティング樹脂：ポリ塩化ビニル(PVC) | | | |
| 物理特性 | 厚さ(mm) | 0.85 | | 0.47 | JIS K 6404 |
| | 引張強さ (N/3cm) | タテ | 1962以上 | 1368以上 | JIS L 1096A |
| | | ヨコ | 1962以上 | 1230以上 | |
| | 伸び率 (%) | タテ | 35以下 | 30以下 | |
| ヨコ | | 35以下 | 40以下 | | |

※ 仕様変更に伴い、断りなく変更する場合があります。

各界との知的連携により、河川の環境及び防災に関する技術の開発と普及

効果

三角水のうの効果、実物を用いた性能確認試験を行い確認している

1. 止水性: 適用水深に対し、設置底面および連結部分からの漏水が無い、あるいはわずかであること
2. 強度特性: 流木など流下物の衝撃および使用時の引きずりなどの摩耗に耐えられる強度を有していること
3. 耐久性: 袋体として十分な耐候性、耐薬品性を有していること
4. 施工性: 人力での運搬・設置が容易にできる軽量は袋体であり、ユニット同士の連結が容易にできること。また袋体に注水ホースなどを使い、水を容易に充填できること。
5. 表示(視認)性: 製造者、型式記号および製造年などの表示が容易に消えないように表示されていること

施工手順

1. 運搬: 設置場所に運搬する。
2. 設置と連結: 三角水のうの向きを間違えないように設置場所に設置し、延長方向に連結する。
3. 注水: 注水ホースを差し込み、給水ポンプを使い、注水する。



適用条件・範囲

三角水のうは適用水深が定められており、適用水深を越えないような場所で設置する。また、本体を構成する膜材の強度による主な適用場所に設置する。

表 III-3 類型別の主な適用場所

| 類型 | | 全高 (注水時) | 適用水深 | 主な適用場所 |
|----|--------|-------------|--------|--|
| 大型 | 膜材 | 100cm | 80cm以下 | <ul style="list-style-type: none"> ・堤防上に適用可能 ・河川上中流部など流木等の流下物があるような場所や都市河川で投棄物が流れてくるような場所への適用に「高強度タイプ」が推奨される |
| 標準 | 高強度タイプ | 60cm | 50cm以下 | |
| | 標準タイプ | | | <ul style="list-style-type: none"> ・堤内地など(堤防上は適用不可) ・流下物が流れてこない場所で内水氾濫対策などに適用 |

費用

三角水のうは、従来の積み土のう工に比較して少人数、短時間で設置することが可能であり、設置費用と設置時間が短縮できる。

表 I-4 土のうと三角水のうの設置時間比較 (8m当り、作業員2名)

| | 土のう (PE製 中詰時:長さ40×幅35×厚さ15cm、重さ約30kg) | 『三角水のう』 (A-80 注水時:長さ4.0×幅2.0×高さ1.0m、容量4.4m ³ (乾重26kg)) |
|------|--|--|
| 必要数量 | 約560個 | 2体 |
| 製作時間 | 約8時間 | — |
| 設置時間 | 約5時間 | 連結約5分、注水 ^{*4)} 約30分 |
| 合計 | 約13時間 | 約35分 |

※実作業をもとに当研究会で算出した概算値 *4) 吐出量約0.3m³/分(300ℓ/分の)エンジンポンプ使用時

・大型の『三角水のう』は、土のう積みと比較して約22分の1の時間で設置できる。

その他

ハイブリッドパネル堤を用いた越水防止工法 (マックスレビーパネル)

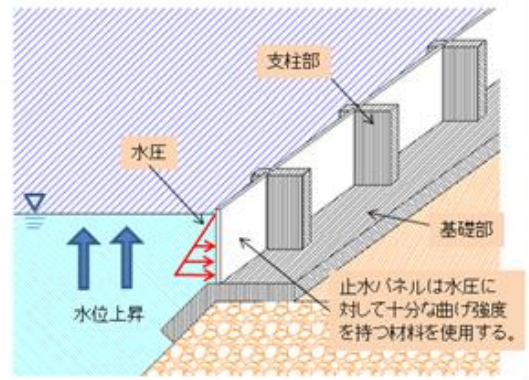
目的

本工法は、土堤やコンクリート特殊堤など恒久的な堤防の嵩上げとは異なり、平常時は、ほぼ現状のままで、洪水時に堤防機能を果たす可搬式特殊堤防(モバイルレビー)に使用する止水パネルに「マックスレビーパネル」を使用した水防工法である。

概要

『マックスレビーパネル』は、予めスリット(建込み用溝)を設けてあるコンクリート製の基礎部と支柱部に『マックスレビーパネル』を建込んで止水壁を構築し、洪水時に溢水や堤防からの越水を防いで水害を防止、あるいは減じることを目的としたモバイルレビーに使用する止水パネルである。

平常時は、止水パネルを取り外しておけば、①川の視認性を妨げることなく(河川風景や景観の保全)、②小動物など生き物の水域と陸域の移動の確保(生態環境の保全)、③人の水辺へのアクセスを阻害しない(親水性の維持)など、現状に近い形で河川環境や景観を保全することが可能である。

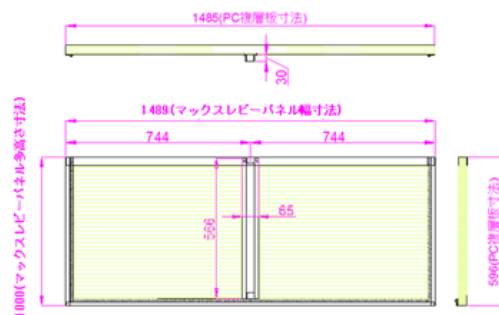


『マックスレビーパネル』の設置イメージ

「マックスレビーパネル」の標準仕様

| 品番 | マックスレビーパネル | 備考 | |
|---------|--------------|--|--|
| タイプ | 採光 | | |
| 設計水深(m) | 1.0 | コンクリート基礎部の高さは除く | |
| 標準仕様 | 構成部材 | 中空 π 枠: 標準寸法H596×w1489 止水ゴ π : π 枠右下側3辺 π 枠 π 取 SUS枠: π 枠外周4辺(t=1加工品) SUS補強枠: π 枠中央部1本(t=2加工品) | |
| | 高さ: H(mm) | 1000 | 最大1000~最小300mm 高さ幅は左記載の寸法内で2段階重ねによる使用は不可 |
| | 幅: W(mm) | 1489 | 最大1489~最小500mm |
| | 厚さ(mm) | 40 | |
| | 重量(kg) | 10 | |
| 中空パネル | 材質: ポリカーボネート | t=32mm | |
| 物理特性 | 引張強さ(MPa) | 縦方向: 63 | JIS K-7162 |
| | 曲げ弾性率(MPa) | 縦方向: 2300 | JIS K-7171 |
| 固定金具 | 材質: SUS | SUS板折り曲げ品(t=2mm) | 堤外地側に設置 |

外観図



各界との知的連携により、河川の環境及び防災に関する技術の開発と普及

効果

ハイブリッドパネル堤用パネルとしての要求性能を満足することを性能確認試験を実施して確認した。

1. 機能性

- 1) 強度特性: 適用水深における水圧に耐えられる強度を有していること。また、ある程度の衝撃(エネルギー)にも耐えられること。
- 2) 止水性: 『ハンディレバーパネル』と建込み用溝の間から漏水がない、あるいはわずかであること
- 3) 景観保全機能: 平常時、基礎部から『ハンディレバーパネル』を取り外し、河岸の景観を保全できること。

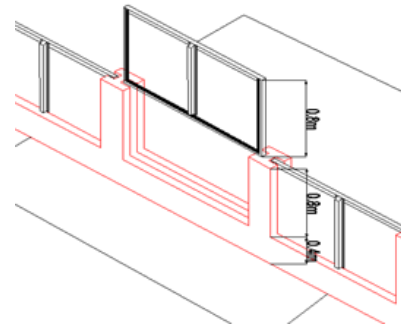
2. 操作性(施工性): 人力での運搬・設置が容易にできること。

3. 耐久性: 止水パネルとして十分な耐候性、耐薬品性を有していること。

4. 表示(視認)性: 製造者名、型式記号および製造年などの表示が容易に消えぬよう表示されていること。

施工手順

『マックスレバーパネル』は、1枚当たりの重量が10kgと軽量であるため、人力により持ち運びが可能で、予め設置された支柱部と基礎部の溝にスムーズに施工することが可能である。また、取り外しも容易である



適用条件・範囲

標準的な『マックスレバーパネル』の適用範囲

○設計水深 最大1m迄

○詳細の設計については、モバイルレバーの適用と設計の手引き (一般社団法人リバーテクノ研究会 編) に準ずる。

費用

「マックスレバーパネル」価格: 7.5 万円/m² 当たり

- 軽量であり人力で持ち運びが可能。
- 支柱へのはめ込みには専門知識や特殊工具は不要で、はめ込み作業は1枚/分程度である。

その他

ハイブリッドパネル堤を用いた越水防止工法 (ダイヤレビーパネル)

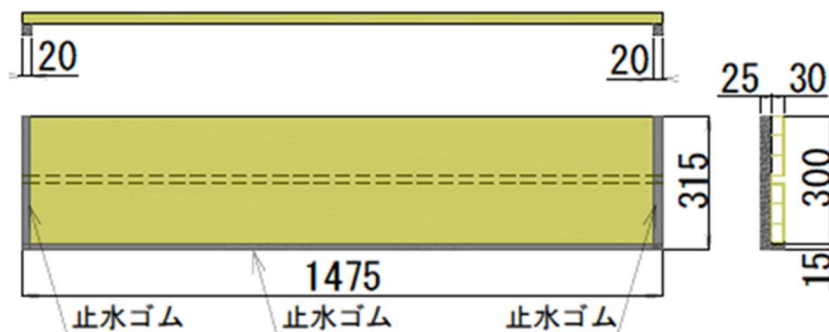
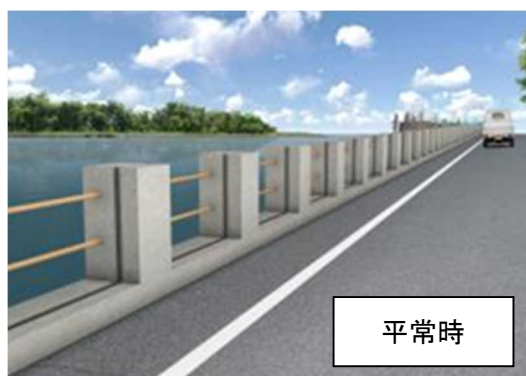
目的

本工法は、土堤やコンクリート特殊堤など恒久的な堤防の嵩上げとは異なり、平常時は、ほぼ現状のままで、洪水時に堤防機能を果たす可搬式特殊堤防(モバイルレビー)に使用する止水パネルに「ダイヤレビーパネル」を使用した水防工法である。

概要

『ダイヤレビーパネル』は、予めスリット(建込み用溝)を設けてあるコンクリート製の基礎部と支柱部に『ダイヤレビーパネル』を建込んで止水壁を構築し、洪水時に溢水や堤防からの越水を防いで水害を防止、あるいは減じることが目的としたモバイルレビーに使用する止水パネルである。

平常時は、止水パネルを取り外しておけば、①川の視認性を妨げることなく(河川風景や景観の保全)、②小動物など生き物の水域と陸域の移動の確保(生態環境の保全)、③人の水辺へのアクセスを阻害しない(親水性の維持)など、現状に近い形で河川環境や景観を保全することが可能である。



各界との知的連携により、河川環境及び防災に関する技術の開発と普及

効果

ハイブリッドパネル堤用パネルとしての要求性能を満足することを、性能確認試験を実施して確認した。

1. 機能性

- 1) 強度特性: 適用水深における水圧に耐えられる強度を有していること。また、ある程度の衝撃(エネルギー)にも耐えられること。
- 2) 止水性: 『ダイヤレバーパネル』と建込み用溝の間から漏水がない、あるいはわずかであること
- 3) 景観保全機能: 平常時、基礎部から『ダイヤレバーパネル』を取り外し、河岸の景観を保全できること。

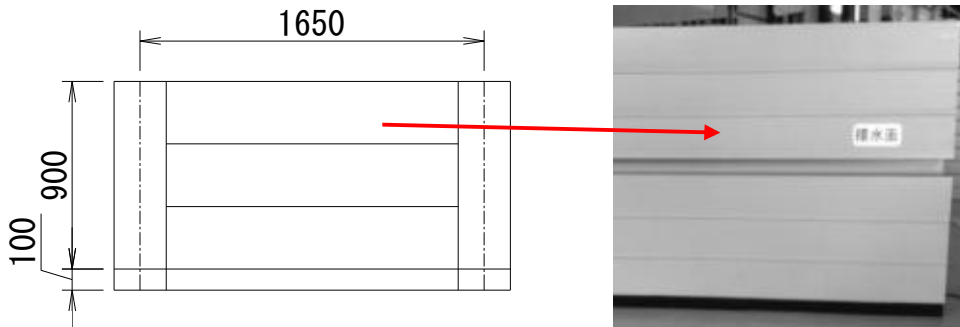
2. 操作性(施工性) 人力での運搬・設置が容易にできること。

3. 耐久性 止水パネルとして十分な耐候性、耐薬品性を有していること。

4. 表示 視認性 製造者名、型式記号および製造年などの表示が容易に消えぬよう表示されていること。

施工手順

『ダイヤレバーパネル』は、1枚当たりの重量が 8kg と軽量であるため、人力により持ち運びが可能で、予め設置された基礎部や支柱部の溝にスムーズに施工することが可能である。また、取り外しも容易である



パネルの設置時には、パネルの「接水面」と記載している側を川側に向ける

適用条件・範囲

標準的な『ダイヤレバーパネル』の適用範囲

- 設計水深 最大1m迄
- 詳細の設計については、モバイルレバーの適用と設計の手引き(一般社団法人リバーテクノ研究会編)に準ずる。

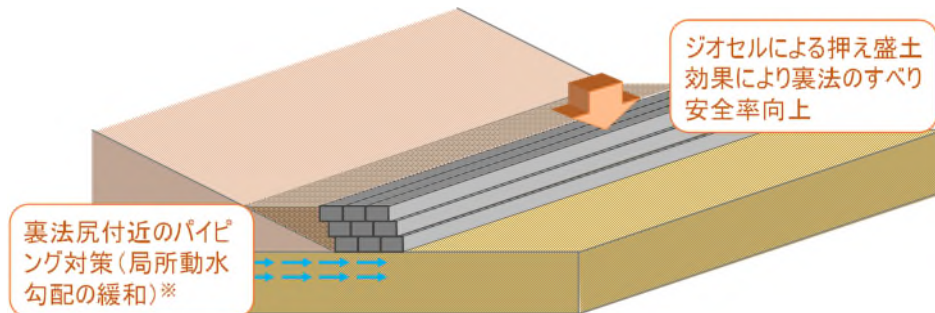
その他

パネルの表面には、別途、木目調や畳調等の意匠性を付与することが可能

ジオセルを用いた堤脚安定工法

目的

本工法は、中小河川において粘り強い堤防を構築するための効率的補強対策として検討したものである。押え盛土の材料にジオセルを用いて、川裏側のすべり安全率の向上を図る。さらに、ジオセルの中詰材に単粒度碎石のような透水性の高い材料を用いて、川裏側法尻部のパイピング対策という効果も期待する。



ジオセルを用いた堤脚安定工法のイメージと効果

概要

1. ジオセル工法

ジオセル工法は、高密度ポリエチレン板やジオグリッドをカゴ状にしたジオセル内部に、土砂や碎石等の充填材を詰めて強度のある構造体を形成するもので、法面保護、擁壁、河川護岸など様々な用途で活用されている。

2. 工法の特徴

■軽量・コンパクト

搬入が容易。折りたたんでコンパクトに梱包・保管。

■簡単施工

人力による展開が可能(重機不要)。狭小な場所でも施工時の制約が少なく、工費・工期の面で有利。

■フレキシブルな構造

耐久性、柔軟性に優れた素材で、現場の形状に合わせた施工が可能。設置場所の制約が少ない。

■堤脚保護・洗掘対策

堤脚保護に加えて、越水時の洗掘対策の効果も期待。

■緑化

前面や上部のセルに良質土を充填することで、表面の緑化も可能。



ジオセルの利用例



ジオセルの展開(曲線部)

各界との知的連携により、河川環境及び防災に関する技術の開発と普及

効果

1. 裏法すべり破壊に対する安全性の向上

押え盛土工によるすべり安全率向上の効果を確認するため、堤体の規模を変えながら、すべり安定解析における最小安全率の変化を確認した。

■堤防及びジオセルの形状

堤防天端幅は 3m、堤防高を 2m、3m、4m、5m、8m とした 5 ケースを設定。法面勾配は 1:1.5。

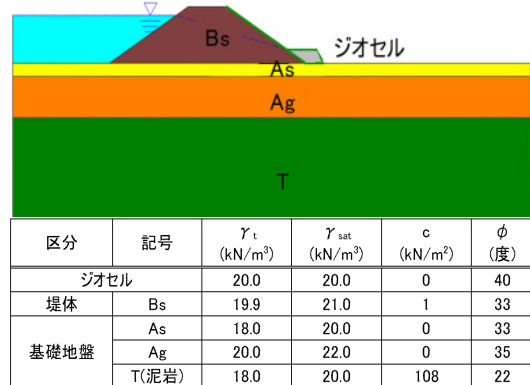
堤防法尻に設置するジオセルは、3 段積み（高さ 0.9m）、堤内側の勾配は 1:0.5 とした。

■水位条件

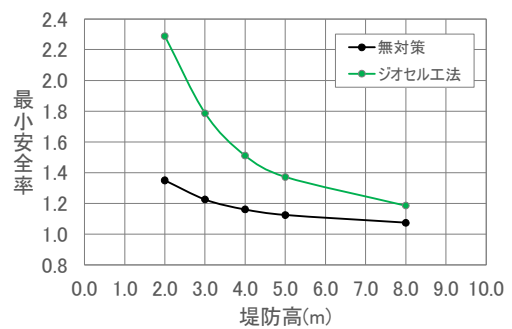
堤体内水位は、川表側の水位から川裏側のジオセル天端に向かう直線状とした。川表側の水位は、堤防天端から余裕高(0.6m)を差し引いた高さ。

■計算結果

堤防高が低いケースで、ジオセル工法の効果が大きい。よって、中小河川の小規模な堤防で効果を発揮する。



土質構成・土質定数



最小安全率の変化

2. パイピングに対する安全性の向上

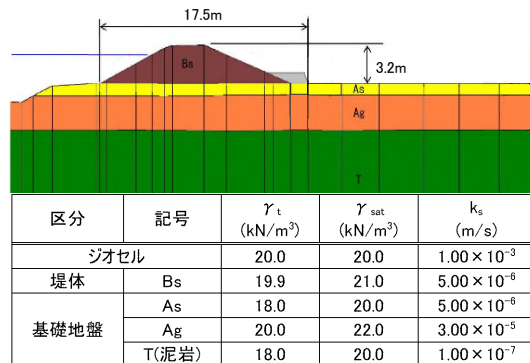
川裏側の法尻部に設置したジオセルの中詰材に、透水性の高い材料($k=1.0 \times 10^{-3} \text{m/s}$ 程度)を用いた場合のパイピング抑制に対する効果を浸透流解析により確認した。

■洪水外力

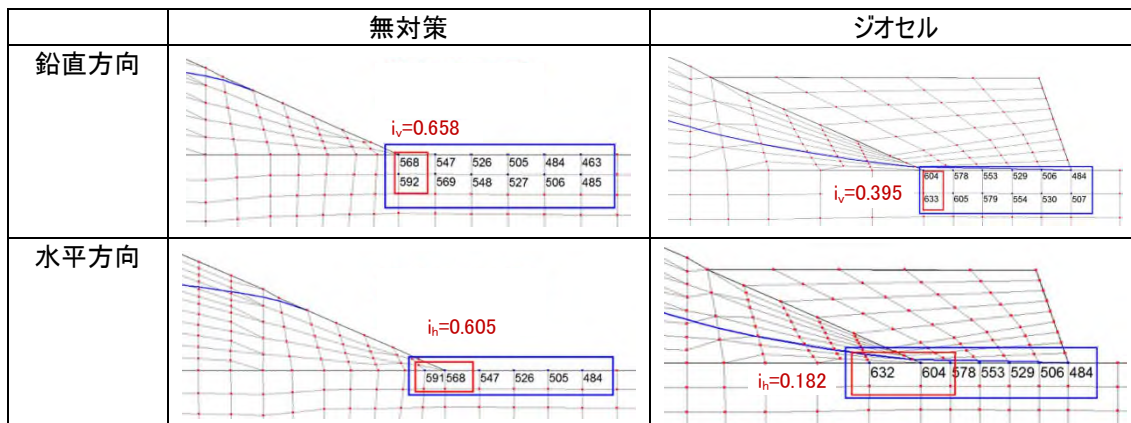
「河川堤防の構造検討の手引き」に従い設定した降雨と河川水位波形のうち、河川水位は計画高水位到達後、そのまま 150 時間程度水位を維持した。

■計算結果

下表のように、無対策の場合と比べて、ジオセル設置後の局所動水勾配は低下した。



土質構成・土質定数



リバーテクノ水防シート「シート被覆工法」

目的

「リバーテクノ水防シート」(以後、水防シート)は、水防工法の一つとして、越水が予測される箇所において応急的に裏のり面及びのり尻部をシート材で被覆して、越水流による侵食や洗掘を抑制し、破堤の回避あるいは破堤までの時間を遅らせることを主な目的として開発したものである。

概要

1. 利用方法

- ・ 水防シートは、堤防川裏側(堤内側)に設置する。これにより、越流水による堤防川裏側法尻の洗掘とのり面の侵食を防ぐ。
- ・ 越水が想定される場合は、従来「積土のう工法」、「せき板工法」、「水のう工法」等が用いられている。水防シートは、これらの工法との併用を想定している。

2. 水防シート形状

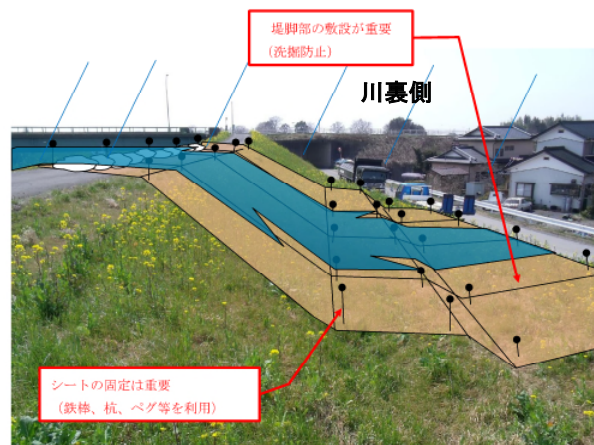
- ・ 水防シートは、対象堤防の形状に合わせて作製される。シート長は、最大 30m 程度。
- ・ シート短辺側の上端と下端に袋閉じ部分を設けており、運搬時に棒を通すことが可能。
- ・ シート長辺側端部は、シートの連結や固定するためのハトメ穴やバックルが設けられている。

3. 敷設と固定

- ・ 水防シートの運搬は、人肩により 2~4 名で行う。
- ・ 敷設時は、堤防天端から展張する。
- ・ 終端側は、越水に伴うのり尻部の洗掘防止のため堤脚部の数メートル先まで敷設する。
- ・ 水防シートの固定は、固定用の単杭(鉄棒・ペグ等)や土のう等の重しを用いて行う。
 - * 土のうは水防シートと連結しない(土のうの流出時の影響を避けるため)。
 - * 天端部では、積土のうや三角水のう(リバーテクノ研究会開発)の下に水防シートを敷くことを想定。

【水防シートに期待する効果】

- ・ 越水が一時的に生じた場合でも、のり尻の洗掘やのり面の侵食を防ぎ、破堤まで至らないようにする。
- ・ 降雨水や越流水の堤防への浸透を防止する(堤防の弱体化を防ぐ)。



水防シートの設置イメージ



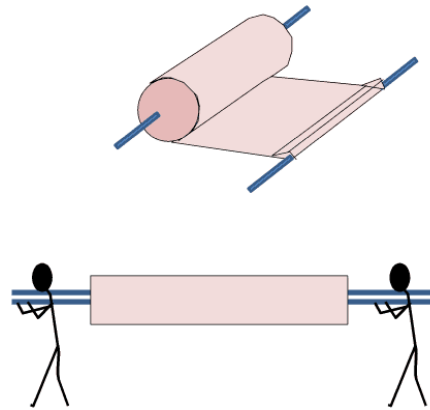
水防シートの展張状況

各界との知的連携により、河川の環境及び防災に関する技術の開発と普及

水防シートの特長

水防シートは以下の特長を有する。

- ・ 難透水性である。
- ・ 有事の際に簡単に水防倉庫から現場に運ぶことができる。
(数人の人力で可搬、車両や特殊な運搬機を必要としない)
- ・ 夜間、強風時、豪雨時でも運搬、敷設が容易である。
- ・ 小人数でも速やかに敷設できる。
- ・ 水にぬれた状態でも、ゴム長靴が滑りにくい。
- ・ 表面せん断強さ(=引張強度)は 0.8033kN/m² 以上
(天端越流水深 0.6mに相当)。
- ・ 他の水防活動の障害にならない。
- ・ 平時は水防倉庫に保管できる。
- ・ 事後の処理が容易で、繰り返し利用が可能である。
- ・ 補修が容易である。
- ・ 費用が安価である。
- ・ 倉庫保管で 10 年以上の耐久性を有する。
- ・ 複数回の有事に使用が可能。
- ・ 寸法は対象地の堤防形状に合わせることが可能。



水防シートの運搬

水防シートの利用方法および類似資機材との比較

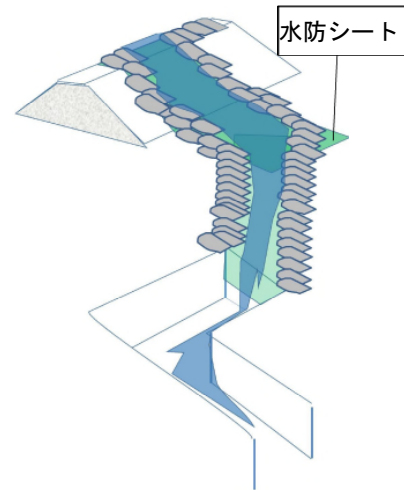
1. 他目的への利用

- ・ 水防シートは、「遮水性のある長いシート」という製品の特徴を利用して、他の水防活動にも利用可能。
- ・ 想定される利用法として以下が考えられる。
 - ① 損傷した堤防に降雨水が浸透するのを防ぐために、天端や堤防のり面を被覆
 - ② 掘り込み河道において、積土のうの上に水防シートをかぶせ越水防止工の止水性を高める。
 - ③ 越流水の応急導水路として利用。

2. 類似資材との比較

水防シートは、川裏側のり尻とのり面の洗堀を防止し、破堤の回避等を目的としたものであり、緊急時にはブルーシートなどの身近なものでの代用も可能である。但し、水防活動は悪条件の中で、短時間のうちに実施できることが重要であり、水防シートは、水防活動の実態を考慮して以下の特性を備えている。

- ① 対象堤防の寸法に合わせて作製するので、短時間で敷設が可能。
- ② 夜間、降雨、強風時も速やかに敷設ができる。
- ③ 耐久性に優れるので、複数回の使用が可能。
- ④ 表面にすべり止め処理をしているので作業時にすべりづらい。



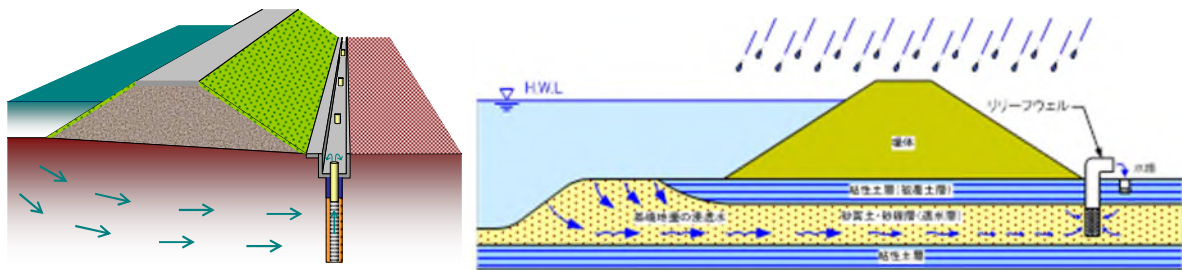
応急導水路としての利用イメージ

リバーテクノウェル工法

(簡易型リーフウェル工法)

目的

本工法は、中小規模の河川堤防を主な対象とし、河川水位の上昇とともに高まった透水層内の揚圧力を、川裏のり尻付近に一定間隔で線状に設置した井戸から自噴させることによって減圧する浸透対策工法である。また、水防工法の一環として応急的に適用するものである。



リバーテクノウェルのイメージ

概要

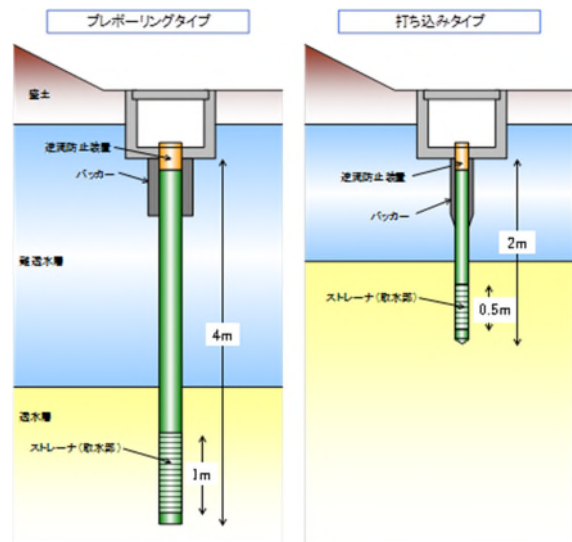
1. リバーテクノウェル工法の特徴

従来のリーフウェル工法は、ボーリングで削孔した後に有孔管を設置し、その周りにフィルター材として礫材料を充填するのが一般的である。この場合、フィルター材の厚さを十分確保するために、比較的大型の施工設備とそのための用地が必要となる。

一方、リバーテクノウェル工法(簡易型リーフウェル工法)は、フィルター材をウェルパイプ内部に設置することにより、設置や施工スペースがさほど必要でなく、水防工法のような仮設的でも適応できる利便性を有する小口径ウェル工法として開発した工法である。

2. 標準構造

リバーテクノウェルの構造タイプは、「プレボーリングタイプ(φ100mm)」と「打ち込みタイプ(φ50mm)」の2種類がある。



各界との知的連携により、河川の環境及び防災に関する技術の開発と普及

堤防の浸透性診断と浸潤監視

目的

堤防の浸透による被災を未然に防止することを目的とする技術である。浸透被災が生じる可能性が高い箇所を絞り込むための浸透性診断と、絞り込んだ箇所において出水時の安全性を監視する浸潤監視モニタリングからなる。

概要

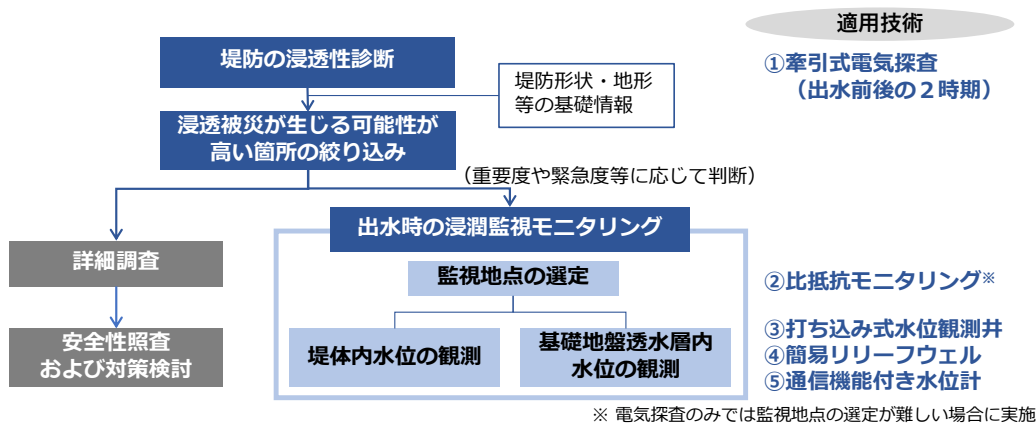
1. 堤防の浸透性診断の特徴

この技術は、効率的かつ低コストで実施できる牽引式電気探査を利用し、対象区間の堤防天端と川裏のり尻部に測線を設けて出水前後の2時期に電気探査を実施、それによって得られる比抵抗変化率をもとに堤体や基礎地盤の浸透性を診断する。浸透性診断の結果と堤防形状・地形等の基礎情報をもとに、浸透被災が生じる可能性が高いと判断された箇所は、重要度や緊急度に応じて、詳細調査を行った後に安全性照査や対策を検討するか、出水時の浸潤監視モニタリングを行った後に対応を検討することを想定している。

2. 浸潤監視モニタリング

出水時の浸潤監視では、裏のりすべりが懸念される場合には堤体内水位の観測を、基盤漏水やパイピングが懸念される場合には基礎地盤内透水層の水位(被圧水頭)の観測を基本とする。堤体内水位は、裏のり部に打ち込み式水位観測井を設置・観測する。基礎地盤透水層内水位(被圧水頭)は、裏のり尻部に打ち込み式水位観測井または簡易リーフウェルを設置・観測する。簡易リーフウェルは、水防等において減圧井戸として利用することも可能である。

観測井は重点監視区間の中から監視地点を選定して設置、監視地点の的確な選定が難しい場合には比抵抗モニタリングを実施する。比抵抗モニタリングは、裏のり部の縦断方向に延長 50~100m 程度の測線を設け、出水時の浸透に伴う地盤内の比抵抗の変化を連続的に測定する。比抵抗変化が顕著に生じる箇所を浸透性が高い箇所として抽出し、監視地点として選定する。観測井には随時データを Web 上で閲覧できる通信機能付き水位計を設置する。これにより、時々刻々と変化する裏のりすべりやパイピングに対する危険度を監視することが可能である。

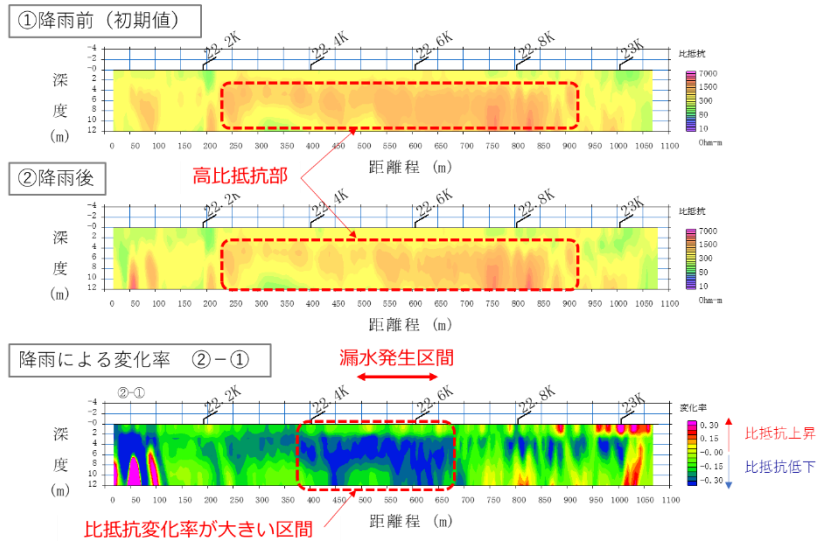


各界との知的連携により、河川的环境及び防災に関する技術の開発と普及

適用技術

① 牽引式電気探査

堤防天端および川裏のり尻部に縦断方向の測線を設けて、出水前後に探査を実施する。探査によって得られた比抵抗分布をもとに2時期の比抵抗変化率図を作成し、変化率の大きさをもとに浸透性の高い箇所を絞り込む。



【牽引式電気探査を利用して出水前後の比抵抗変化を測定した例】

② 比抵抗モニタリング

堤防のり面等に縦断方向の測線を配置して固定電極を設置する。比抵抗測定は、出水の前

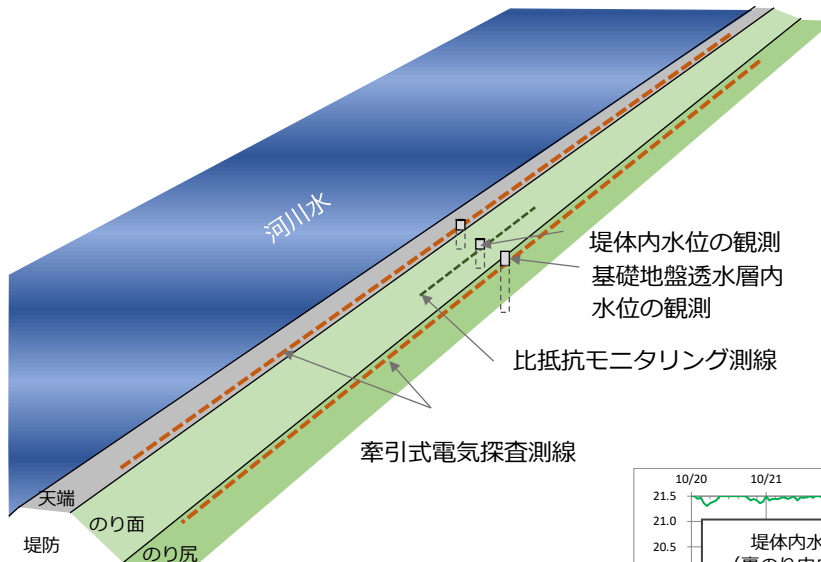
後において1時間程度の間隔で実施し、その結果をもとに、時間とともに変化する比抵抗変化率を求め、比抵抗変化率の大きい箇所を監視地点として選定する。

③ 堤体内水位の観測 (打ち込み式水位観測井)

堤体に設置された打ち込み式水位観測井内に通信機能付き水位計や自記水位計等を設置し、堤体内水位を観測する。

④・⑤ 基礎地盤透水層内水位の観測 (簡易リーフウェル・通信機能付き水位計)

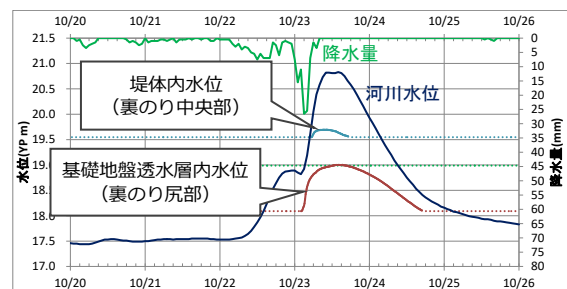
基礎地盤の透水層まで設置された打ち込み式水位観測井または簡易リーフウェルに通信機能付き水位計や自記水位計等を設置し、基礎地盤透水層内の水位 (被圧水頭) を観測する。



【比抵抗モニタリングと堤体内水位

・基礎地盤透水層内水位の観測のイメージ】

【水位観測結果の例】



役員

| | | |
|---------|-------|--|
| 会長 | 中川 博次 | 京都大学 名誉教授 |
| 理事長 | 石橋 良啓 | 八千代エンジニアリング株式会社 専務執行役員 |
| | 関 克己 | 公益財団法人 河川財団 理事長 |
| | 成田 賢 | 応用地質株式会社 代表取締役社長 |
| | 齋藤 周 | 三井化学産資株式会社 代表取締役社長 |
| | 中村 哲己 | 株式会社建設技術研究所 代表取締役社長 |
| | 高木 茂知 | パシフィックコンサルタンツグループ株式会社 代表取締役社長 |
| | 久世 康年 | 太陽工業株式会社 相談役 |
| 監事 | 田中 誠 | 中央開発株式会社 取締役副社長 |
| | 高橋 寧 | 旭化成アドバンス株式会社 取締役執行役員 |
| 特別政策顧問 | 脇 雅史 | 元参議院議員 全国水防管理団体連合会 会長 |
| 特別顧問 | 足立 敏之 | 参議院議員 |
| 特別技術顧問 | 道上 正規 | 鳥取大学 名誉教授 |
| | 間宮 清 | |
| 技術顧問 | 山田 正 | 中央大学理工学部 教授 |
| | 中川 一 | 京都大学防災研究所 教授 |
| 研究顧問 | 森 啓年 | 山口大学工学部 准教授 |
| 技術開発委員長 | 三木 博史 | 株式会社三木地盤環境工学研究所 所長 元独立行政法人土木研究所 技術推進本部長 |
| 相談役 | 都丸 徳治 | |

会員企業

| | |
|-------------------|-----------------|
| 旭化成アドバンス株式会社 | いであ株式会社 |
| 応用地質株式会社 | 川崎地質株式会社 |
| 基礎地盤コンサルタンツ株式会社 | 株式会社建設技術研究所 |
| 株式会社ダイヤコンサルタント | 太陽工業株式会社 |
| 株式会社田中 | 中央開発株式会社 |
| 株式会社東京建設コンサルタント | 東洋紡株式会社 |
| 日本工営株式会社 | 株式会社ニュージェック |
| パシフィックコンサルタンツ株式会社 | 三井化学産資株式会社 |
| 三菱ケミカルインフラテック株式会社 | 八千代エンジニアリング株式会社 |
| ユニチカ株式会社 | |

(50 音順に記載)

事務局

R I R T Research Institute of River Technology
一般社団法人 リバーテクノ研究会
〒154-0001 東京都世田谷区池尻 2-33-16
●TEL : 03-3414-5091 ●FAX : 03-3791-5454
●URL : <http://rirt.or.jp/>